

学位論文抄録

HIV感染合併赤痢アメーバ症の疫学と臨床上的特徴について
(Epidemiological and clinical manifestation of *E. histolytica* infection in HIV-1-infected individuals in Japan)

渡 辺 恒 二

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻
エイズ制圧のためのトランスレーショナル研究者育成コース

指導教員

岡 慎一 客員教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻エイズ学区

学位論文抄録

[目的] 日本を含む東アジアの先進国では、性感染症として特に男性同性愛者 (MSM) の間で赤痢アメーバ症が拡大している。同じく HIV 感染症が MSM で感染拡大しているこれらの地域では、HIV 感染合併赤痢アメーバ症の症例数が急増していることが 2000 年以降次々と報告されている。本研究の目的は、本邦で感染拡大する HIV 感染合併赤痢アメーバ症の疫学と臨床的特徴を明らかにすることである。

[方法] 臨床情報は国立国際医療研究センターエイズ治療研究開発センターの HIV 感染患者コホートを解析した。遺伝子解析のため、赤痢アメーバ症を発症した患者サンプルから *E. histolytica* DNA を抽出し、t-RNA 近傍にある Short Tandem Repeats (STR) 6 領域のシーケンス解析を行った。

[結果] 2006 年 1 月から 2012 年 4 月までに初診となった患者のアメーバ抗体血清陽性率 (seroprevalence) は、21.3%であった。特に性行動の活発な男性同性愛者で陽性率が高い傾向にあった。臨床検体から得られた *E. histolytica* 株の遺伝子解析では、14 サンプルから 11 種類と多様な遺伝子型 *E. histolytica* が同定されただけでなく、全てが過去に日本の臨床株でしか同定されていない遺伝子配列を持つことが判明し、*E. histolytica* が国内で独自の進化を遂げている可能性が示された。臨床像の解析からは、HIV 感染による免疫状態と病型や治療効果の間に相関は見られず、早期診断例ではニトロイミダゾール系薬剤による内科的治療が奏功することが示された。また、侵襲性赤痢アメーバ症治療後のシスト駆除は、侵襲性赤痢アメーバ症再発率を低下させないことが証明され、再発の有無は残存シストの有無より、新たなシスト暴露機会の有無に大きく依存することが示された。また、無症候性抗体陽性者の解析により、抗体高値 (抗体価 \geq x400) の患者は無症状であっても大腸腸管内に潰瘍性病変を有する *E. histolytica* の潜在性感染を来している可能性が高く、抗体高値の患者では高率に (1 年以内に約 20%) 侵襲性赤痢アメーバ症を発症することが示された。

[考察] 日本の HIV 感染患者には、性感染症として赤痢アメーバが流行しており、しかもアウトブレイクの時期は過ぎ、エンデミックの状態であると推察された。また、*E. histolytica* は比較的長期間の潜在性感染を来す可能性が明らかにされたことで、日本での流行を収束させることは極めて困難である可能性が示唆された。

[結論] 日本で赤痢アメーバ症が性感染症として国内で流行していることが改めて示され、その制御は非常に困難であることが示された。今後は、アメーバの臨床・疫学だけでなく、病態生理を含めた更なる研究データを集積させ、赤痢アメーバの流行に対処すべきである。